

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成19年5月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第38巻第5号



沖

俳句雑誌「おき」

5
月号

沖
発行所

清

明

能村 研三

「俳句朝日」の休刊

職 住 の 同 円 に 降 る 桜 葵

清 明 や 琴 立 て か け し 二 畳 部 屋

追 越 し の 歩 幅 小 刻 み 桜 ま じ

一 睡 の 覚 め 際 ぬ く し 鳥 語 か な

一九九五年の五月に創刊された「俳句朝日」が、本年の六月号をもって休刊するという。理由は、出版不況、雑誌運営の厳しさというが、朝日新聞社がついているので、何とかなると思っていたが、やはり厳しい時代の現れなのだろう。

創刊号は東山魁夷画伯の「夏に入る」という絵が表紙を飾ったのが印象的で、この号には先師登四郎が作品を、私も一文を出稿している。

その後大崎紀夫編集長時代には、福岡の俳句大会で講演をさせていただいたり、地元市川では詩人の宗左近さんにも出席いただき「手児奈俳句大会」を「俳句朝日」の主催で開催させていただいた。

また誌上で作品を発表する超結社の吟行会が何回か開催され、「沖」から私も含めて多くの人たちがこれに参加した。中でも門司で寒中の夜半に行われる「和布刈神事」や三河の三候まつりなどが印象に残っている。

青 鰻 や 駆 け 引 き 出 来 ぬ 顔 で あ り

土 蔵 よ り 葉 臭 漏 れ し 花 曇

朴 の 芽 を 育 む た め の 月 あ か り

旧岩崎邸

春 日 差 す 菱 紋 尽 し の 書 院 か な

洋 館 の 煤 罅 し る き 春 暖 炉

春 惜 し む モ ザ イ ク タ イ ル の 暖 炉 縁

創刊間もなく創設された「朝日俳句新人賞」など新人の発掘にも力を入れ「沖」から第三回に荒井千佐代さん、第九回には掛井広通さんが受賞するなど、賞の面でも「沖」とは相性の良い総合誌であった。

先師登四郎は巻頭ページを飾る「折々の秀句鑑賞」を長く連載し、これをまとめて後に一冊の単行本になった。

近年は九十歳を超える元気な老人の俳句を紹介したり、若手を多く紹介する特集など世代を超えた人たちからも愛読される雑誌であっただけに休刊が惜しまれる。

なお、毎年私が選者として出席している朝日の千葉俳句大会は、朝日カルチャーと朝日新聞千葉総局の力で開催されることになった。



能村 研三

彼岸東風

林 翔

秋櫻子の代表句

三月二十八日、市川市文化部長としての能村研三氏からの依頼で講演をすることになった。演題も「わが師水原秋櫻子を語る」でとの依頼であった。講演の中で挙げた秋櫻子の名句は、「筑波山縁起」の連作五句のほか

花の雨先づ竹幹に走りけり

馬酔木咲く金堂の扉にわが触れぬ
梨咲くと葛飾の野はとのぐもり
冬菊のまどふはおのが光のみ

瀧落ちて群青世界とどろけり

遠目には花縫ふ鳥よ白鷺は

であったが、予定した講話は一時間で終ってしまったので、残りの三分は余談と質疑応答に宛てた。質問

辻に出てそれと知りけり春北風

の中に、「それ以外の秋櫻子の代表句を挙げて下さい。」というのがあったが、咄嗟には答えられず、「高齢ですから頭の回転が悪くなっています。すぐには言えません。」と断

紅梅の蜜吸ひ雀羽搏くよ

ってしました。しかし講演会が終わった後も気になっていたので、ここに挙げてみようと思う。

紫木蓮踊りて止まず風止まず

鶯や前山いよよ雨の中 大正13年

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

昭和2年

天平てんぺいのをとめぞ立てる雛かな

昭和3年

葛飾や浮葉のしるきひとの門かど

昭和4年

向日葵の空かゞやけり波の群

昭和11年

門かどとちて良夜の石と我は居り

昭和20年

伊豆の海や紅梅の上に波ながれ

昭和25年

麦秋の中なるが悲し聖麿かど櫛か

(浦上天守堂) 昭和27年

蒲公英の絮毛しづかに風を待つ

春愁の眼が追ふよ離りゆく尾燈

林 翔



真間の手児奈旧蹟

篁に遠き世の音彼岸東風

蒼茫集



レガッタ

千田百里

鞆に座して錘のやうにゐる
ゴールせしレガッタ權を捧げ銃
真新なる菜箸せはし雛祭
春愁に叶ふ瑠璃色インクかな
木の芽起しの雨やはらから隠居して
淡雪や父の遠忌の香を焚き

浮遊感

上谷昌憲

芽柳を仰ぎて何の浮遊感
腰をやや引き壺焼をすすりけり
春浅し疎林の奥の昆虫館
しろがねのビルの量感春しぐれ
掌に受くる雨の重みの露の臺
白は真くれなゐは情梅ひらく

春の闇

河口仁志

地球とて星のひと粒春の闇
おぼろ夜の黒き鬘妙義山
春一番仲間啼きして田の鴉
能を観て帰る道玄坂おぼろ
初蝶のまだ飛び足らぬよろけ飛び
長男に長男が生れ菖蒲の芽

春や急

酒本八重

小旋風が疾風となりて春や急
遠くから齡近付く榛咲きて
野遊の振幅ほどに水の影
山菜莢のけぶりて山の製材所
「十三との砂山」唄ふ春宵津軽びと
春愁や鏡嫌ひになつてをり

かぎろひ 松井のぶ

都心の雪おひねりほどの宙の愛
かぎろひの沼は手品師魚の跳ぶ
春がすみ浮力のつきし研究所
逃水も攫つてくれぬ副作用
病む夫に花粉症まで忍び寄る
春愁や夫に戻らぬ詞あり

鳥の恋 大畑善昭

春の霜白し朝刊に龍太の死
公園の空の真四角鳥の恋
一瑕だになくて炎の落椿
白鳥の玲瓏の列帰りけり
出始めて春子の楢木子沢山
啄木忌啄木は鉢いくつ割り

志賀島 北川英子

砂州一二里灘へ逃水追ひつめて
流れ藻の渚に乾く彼岸西風

花鳥賊の六枚を干し小商ひ
春惜しむ魏志倭人伝逆走し
春愁をか引潮にあづけきし
玄海後醍醐天皇五年の荒風に花満を持す

真間山 秋葉雅治

三月や艇庫開きを待つ川面
結ばれぬひとのおもざし古ひな
句座へ急ぐ真間山東風の磴けはし
握手され頭叩かれ合格子
飾り羽に風の喝采春帽子
ゲレンデにまさかと思ふ青き踏む

離陸 荒井千佐代

春一番をみなの羽化のはじまれり
公園に移動図書館地虫出づ
差す潮の岸打ち初むる桜かな
春愁のフォルテツシモでショパン弾く
おそらくは二度と来ぬ町風花す
雪やみて潮の匂へる離陸かな

潮鳴集

点 滴 古 屋 元

鋤き込むや黄砂も安房の土として
アンティーク店春愁の椅子ばかり
点滴の小さき勾玉春立ちぬ
菜の花を飾りて病室は小庭
病棟の風光る窓閉ざす窓

ことことす 富川 明子

淋しらの胸にあてたき紙懐炉
紙風船突いて空気のかたちかな
気に入つてくれしや菓箱ことことす
菱餅にちひさな歯がた風匂ひ
蛇穴を出でいきなりの悲鳴きく

ひと休み 伊藤 真代

沖繩へ飛びいきなりの更衣
化身ともひめゆりの塔のすみれかな
囀を聞く黙読のひと休み
あくせくをとばす春野の深呼吸
桜咲く夫天国へ行きしまま

紙 雛 菊地 光子

ひとり夜の襟深く折る紙雛
やはらかく雲の影おき水温む
囀やけふ休演の音楽堂
海風の届きてをりぬ吊し雛



沖作品



能村研三選

千葉

篠藤千佳子

ふらここを漕いでこの旅終らせる
掃除機の蛇腹這ひ出す四温かな
啓蟄の暗証番号相違かな
知りたきは己がことなり懐手
正直と愚直の違い大根引く
気泡めく硝子の春のエレベーター
折り紙にやま線たに線水温む
啓蟄や瓶の底から乾燥剤
杏仁豆腐春雲を掬ふやう
草萌や人体ほどの楽器抱き
濁流の糸ぐる力よ雪解光
風しまくは鬨の声とも野火猛る
森林浴いな木の芽浴鳥語殖ゆ
青空を疵つけぬやう剪定す
鳥引きしあとの夕星人悼む

東京

小嶋 洋子

茨城

内山花葉

東京

齊藤 實

氷柱解けをり尖端の饒舌な
ミルフィュークの層の境目涅槃西風
啓蟄や血のさかのぼる採血管
鬼のぬぬ家こそばゆし春立てり
水際を透明にして蝌蚪の影
山々の笑へる裾を塩の道
桃の日を明日に小さな窓灯り
摘草の子の追ひ駆ける三墨打
鎌倉の深き朧夜原節子
春のせて沖へ飛び立つ銀の翼
カーナビになき道ゆけばおらが春
春の雪湖国に古き駅舎あり
クロッカスまるで大地のチアガール
雛の市連山遠く夕あかり
母の背の小さくなりてさくら冷

市川市

くらたけん

東京

七種 年男

神奈川県

矢崎 昌

沖作品 15句選評

*
能村研三

ふらふらここを漕いでこの旅終らせる 篠藤千佳子

旅は、非日常の生活への飛躍で、現実からの離脱でもある。旅が終っても、その非日常の世界にいつまでもとどまっていたという気持ちが湧いてくる。現実を忘れさせるようなすばらしい旅に遊ぶと、現実の世界に近い距離ができてしまう。そんな思いの中、旅の心地よい余韻を秘めながら旅先で「ふらふら」に出会った。せめてこの「ふらふら」を漕いでから現実の世界に戻ろうとしたのだ。

気泡めく硝子の春のエレベーター 小嶋 洋子

外の展望が出来るシースルーエレベーターは流行りで、今はいろいろなところで見られる。乗っていると高所恐怖症の人はやや苦手かも知れない。この句はエレベーターに乗っているのではなく、建物を遠くから眺めている時に出来た句で、無表情で冷たい感じの高層ビルであっても、硝子の箱が登り降りする

のを見ていると何かアクセントがあって楽しくさせてくれる。高速でひたすら上昇する光の箱は何か気泡が登っていく姿に見えた。比喩の発想が若々しい。

濁流のゑぐる力よ雪解光 内山 花葉

雪解け水の一滴のしずくが、せせらぎになり、やがて大河となり海へ流れ行く。今年は暖冬だったせいか雪が少なかったようだが、最初はほんのわずかな雪解水も渓谷を下ってくるうちに急流となり巖も崩すような勢いとなる。自然の力の偉大さを改めて感じ取るものだが、この句はその力強い自然の力をリアルに描いている。

ミルフィーユの層の境目涅槃西風 齊藤 實

ミルフィーユはフランス発祥の菓子的一种。フランス語でミルは「千」、フィーユは「葉」を意味しており、一般的に「千枚の葉」という意味だそうだ。何とも折りたたんで作るもので、折りたたむ行程を重ねるほど層が増し、沢山の層をなしているという状態を「f」で表現したようだ。そんな最も西洋風な素材に涅槃西風という東洋的な季語をぶつけたのが面白い。

山々の笑へる裾を塩の道 くらたけん

新潟県の糸魚川から長野県の松本に至る「千国街道」は「塩の道」と呼ばれ重要な街道であった。現在もいろいろな遺構が残されているが、日本海からすぐに急坂となるこの道は峻険な北アルプスの山々に抱かれている今ののような交通手段が無い時代であったから塩を運ぶ苦勞も大変であっただろう。山笑うという季語を旨く活かした一句である。

(以下略)